DBKだより

発展途上国援助・ドンボスコ基金

2012年12月20日　第10号

発行人:チプリアニ・アルド

友人、恩人の皆様

神は人となり、わたしたちのうちに住まわれた（聖書）

クリスマスが近づいていますが、今年も皆様のおかげで、ボリビア、ソロモン諸島、ペルー、東チモール、アルゼンチン、スーダン等の多くの国の人々のために希望と愛の光を灯すことができました。

この季節、教会に飾られる、素朴なうまやの御降誕の場面をごらんになることがあるでしょう。マリアとヨセフ、牛やろば、羊飼いと羊たち、天使……幼な子が飼い葉おけに寝かされると家族が勢ぞろいします。

クリスマスは家庭の祝いですが、日本で、世界で、多くの子どもたちが家庭の温かさを知らずに過ごすことでしょう。この大変な時代、私たちの社会は絶望と利己主義に覆われているように見えます。しかし聖書によれば、闇が深いところに、いっそう恵みが注がれます。私たちはその恵みを信じ、日々、小さな善意の行いをする、その勇気を持ちたいと思います。人類は希望がなければ生きてはゆけないでしょう。

今年の九月、サレジオ会総長パスクアール・チャーベス神父が来日しました。ドン・ボスコの9代目後継者です。チャーベス総長は、私たちが受け継いでいるドン・ボスコの使命、青少年の教育について強く訴え、私たちに目標を残しました。

・人間としての豊かな価値観、気高い心、理想を持つ若者を育てる。

・多様化した競争の激しい社会に入って自立し、さまざまな挑戦に立ち向かえるように、十分な知識・技能を身につけさせ、一人ひとりの能力をのばす。

・深い連帯の意識を持ち、他者のために生きることのできる〝新しい市民〟に育てる。

DBKの教育支援も同じ目標を持ち、人を育てることによって希望の灯を広めたいと願うものです。

私たちと連帯するため、幼な子としてお生まれになった神を祝うクリスマスに、皆様お一人おひとりのためにお祈り致します。神がいつも共におられ、力づけてくださいますように。今後とも、助けを必要とする多くの方たちと愛・希望を分かち合えるよう、祈りによって、あるいは経済的支援によって、共に歩んでいただければ幸いです。皆様の上に、神様の豊かな祝福がありますように。

二〇一二年十二月二十日

代表

チプリアニ・アルド神父

南スーダンは今

これまでも「DBKだより」で、スーダンのドナーティ神父の手紙（100校プロジェクト）をご紹介していますが、今回はサレジオ会広報ANSによるフェリントン神父（サレジオ会スーダン地区長）のインタビューをご紹介します。（抜粋）

＊　＊　＊

サレジオ会は、スーダン共和国と、二〇一一年七月に独立した南スーダン共和国の両方で働いています。

南スーダンの若者たちの置かれている状況には、二つの側面があります。一つは、自由の空気がみなぎっていること。アフリカ系でキリスト教徒の多い南スーダンの人々は、長年に及ぶ内戦が終わり、北のアラブ系政府の支配から解放され、自由を味わっています。二つ目の側面はしかし、若者にとって将来の展望が見えないことです。インフラも教育機関もありません。首都のジュバを除いて、電気も通っていません。北からの難民の人々は家もない状態です。

現在、北のスーダンと南スーダンの間では、幸いに国境での紛争は収まっており、南スーダンで豊かに産出され、パイプラインがスーダンを通る原油の扱いについて、両国の話し合いがエチオピアで平和に進められています。ただ、スーダンの南部は南スーダンに親近感を持つ反政府運動があり、政府の空爆を受けたりしています。いつも犠牲になるのは子ども、女性、弱い立場にある人々です。

サレジオ会はスーダンに三つの共同体、南スーダンに四つの共同体があります。南スーダンでは、すべての活動の場に教会があります。いくつかの小学校、二つの高校、診療所、ラジオ局があります。ラジオ放送を通じて、遠い村の人々ともつながっています。そのような遠隔地の村十五～二十箇所に寺子屋のような小さな教室があります。スーダンでは、首都のカルトウムに教会を持っています。内戦で難民となったキリスト教徒の人々の教会です。前科のある若者のための職業訓練校と、もう一つの技術訓練校もあります。生徒の九十五％はイスラム教徒です。

スーダンでも南スーダンでも、現在十五の男女修道会が働いており、私たちの間には大きな一致があります。貧しさが私たちの共通項です。教区や修道会が呼びかける会合で集まり、体験や活動を分かち合っています。スーダンの人々と一つになっている私たちは、貧しさ、苦しみによって一致する人々と共に一致するのです。希望や不安も分かち合いますが、経済的なことやビザ更新のことなど、具体的な助け合いもあります。

ボリビアから

恩人の皆様、

今年もクリスマスが間近に迫ってまいりました。昨日、十二月十三日の夜、四十時間近くの長い旅（南米ボリビアから日本）を終え、成田空港から四谷のサレジオ管区長館に着きました。そして今朝（十四日）の、共同祈願の祈りの中に、次のような言葉がありました。「開発途上にある国々を助ける力をお与えください。すべての民が兄弟として平和に暮らすことができますように。」

思いやりの心でボリビアの、私たちサレジオ会の貧者救済事業を継続的に助けてくださっている皆さま、お一人、お一人に、心から感謝いたします。

今年度も皆さまのご支援によって、サレジオ会の養護施設、保育園に、毎月お米を届けることができ、施設長の神父から感謝の言葉をいただきました。また、学校のない貧しい地域での小・中校建設も完成し、貧しい生徒に代わって、皆さまに感謝いたします。

どの人が貧しい人か、どの国が貧しい国かと申しますと、一日一ドル以下で暮らしている人や国が貧しいと言われるそうです。ボリビアの、二十年以上勤務した警察官の給料が二百ドルです。そして平均七人家族ですので、一人の一日の生活費がおよそ一ドルになります。

ＮＨＫの今年六月の海外ニュースをごらんになって、ご存じの方もおられるかと思いますが、多くの警察官と妻が、現在の給料では生活ができないと大規模な抗議デモがありました。新聞も大々的に、警察官の実情を伝えました。警察官の多くは給料だけでは家族をまかなえないので、勤務時間外はタクシーの運転手、左官などの副業をしているのです。実に多くの老若男女が物乞いをしている光景が毎日、町のいたる所で見受けられます。

今年の四月十三日付のボリビアの大手新聞社「デ・ベール」紙によると、ユニセフの調査結果では、ボリビアの五十八％の子どもが貧困状態にあり、三十九・七％の子どもには家がない」と報告されています。マザー・テレサは「私たちの事業は大海の一滴にすぎません。けれども、この小さな一滴がなければ大海はないのです」と言っています。私たちサレジオ会の貧者救済事業も、この小さな一滴かも知れませんが、愛をこめて行われた小さな善行は、神さまのみ前では決して小さなものではないのです。

今年の十月十一日から来年の十一月二十四日までの期間をベネディクト十六世は「信仰年」と定められました。

非常に大切な信仰、それは「天に、いつくしみ深い父なる神がおられ、私たち、地上に住むすべての者は兄弟姉妹であり、そしてイエス・キリストが教えてくださったように、すべてに超えて父なる神を愛し、同時に兄弟姉妹を言葉と行いで愛すること」なのです。

寛大な心の持ち主である皆さまの上に幼きイエスさまの豊かな恵みと祝福がありますように。

今年も、術後の眼の治療のため、十二月十三日から二〇一三年二月十三日まで一時帰国しています。

連絡先は左記のとおりです。
携帯電話　090-7716-4111
FAX　03-3353-7190
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12　サレジオ会管区長館

ボリビア宣教師
倉橋輝信 神父

ソロモン日記
宣教師の思うこと

長年にわたりソロモン諸島のテレで働いてきたラップ神父は、このたび日本に帰国。宣教師としての思いを寄せてくれました。

＊　＊　＊

十二月九日（待降節第二主日）

今日の福音には、皇帝や総督、領主、大祭司とそうそうたる人々の名が続いた後、無名の人の名が現れる。ヨハネという人だ。不思議に思った。ローマの政治家やユダヤ教の聖職者ではなく、ヨハネだけが主の道を準備しようと呼びかけた。

次の日曜日の準備のため、十六日（待降節第三主日）の福音を読んだ。「着物を二枚持っている者は、持っていない者に分け与えなさい」（ルカ三・十一）。このメッセージは私を悩ませた。持っているものの半分を分け与えるということなのか、それとも一枚を残してあと全部分け与えるということなのか！

思いめぐらした後、持っていた十三着のうち、六着を残してあとは人に上げた。

十二月十日

またルカ三・十一を読んでショックを受けた。また半分減らすの？　そうしたくない！　もう何もなくなるじゃないか！

十二月十一日

帰国三日前。荷物の準備をしながら考えた。物を減らしてよかった。飛行機に二十kgしかのせられないから。この際、さらに半分減らそう。上着を三枚だけ残した。気持ちが楽になった。

十二月十二日

別れのあいさつに来てくれる人々がいた。ある人は「あなたの自転車をください」、また別の人は、「あなたを忘れないために、あの壁掛け時計をください」と言った。「ソロモンに戻るとき、携帯電話、ポータブル・ビデオ・プレーヤーを持ってきてください」と言う人たちもいた。彼らは私を何者と思っているのだろう。

十二月十三日

持ち物を人に分けたが、自分の行動を偽善的に感じる私だった。人に分け与えて二十kgだけの荷物で帰国する姿は美しい。でも、日本に帰ったらまた物を手に入れるだろう。欲の心を捨てなければ、また不要なものを増やすことになるだろう。

十二月十四日

ソロモンの人々の期待と私の考えには隔たりがある。人々は今必要なものを手にすることで満足している。しかし私は、子どもたちが社会性を身につけることを願って遊具のある公園を造った。子どもたちは公園でただ楽しく遊ぶだけでなく、譲り合うことや、物を大事に扱うこともおぼえる。子どもたちが喜んで教会に集まることを願い、皆でいろいろな物を造ってきた。それは、目に見える物以上に、精神的な実りを得るためだ。

結果がすぐに出なくても、将来につながることを願って取り組むことが多いが、それが人々にどこまで伝わっているかはわからない。自分の価値観と異なる価値観、日本の生活と全く違う生活を生きる人々の考え方に順応すること、人々の心を理解することの難しさを、つくづく感じている。

春山ミカエル・ラップ

DBKだより 第10号
2012年12月20日
発行人:チプリアニ・アルド
発行所:サレジオ管区本部
〒160-0011　東京都新宿区若葉1-22-12
Tel:03-3353-8355　Fax:03-3353-7190
dbk-gia@donboscojp.org

ご寄付くださる方は以下にお振り込みください。

郵便振替　口座番号
00100-4-560725
加入者名
発展途上国援助・ドンボスコ基金